

燃える家、または輝くこと
へのイメージ



せいやん

燃える家、または輝くことへのイメージ

何年前のことだったか。

あれは RadioHead の KID A というアルバムを買って聞いた夜のこと。

重い重いロックを聴いて寝たせいで、変な夢を見た。

—— ある外国の風景。白い土壁に赤い瓦屋根の街並みが広がる景色。

どの家も、太陽を浴びて綺麗に輝くなか、一軒だけ、暗くひっそりした家があった。

なんであの家だけ暗いのかな、なんて少し思ったけど、そんなに気にも留めなかった。

やがて夜が来た。

全てが闇に包まれる中、一軒だけ赤々と輝く家があった。昼間見た、あの目立たない家だった。

その家は、燃えていた。と言っても、火事だったわけじゃない。

そこが夢の都合のいいところだけど、燃えて焼け焦げていくわけじゃなく、電気の光でもなく、ただ自ら光を放つ。

まるで燃えているとしか言いようのない、自らの命を削るような、赤々としたひかりを。

僕はただそれを、遠くからずっと見ていた。——

夢から覚めて、ふと気がついた。

そうだ。昼間に輝くということは、ただ、太陽の光を反射するということではない。それは、みんながやっていること。

そうじゃなくて、あの家のように、光がないところで自らを削って光を放つ、それが本当の意味で輝くってことなんじゃないか。

反射するんじゃない。自分を燃やして輝け。

あれ以来、自分の片隅にいつもある、ひとつのイメージ。